

小田原史談

第65号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-2-15

法印快運と其の時代

加藤 誠 夫

足柄上郡大井町金子、最明寺第十五世、法印権大僧都、快運は、天正六年八月二十三日に豆州走湯山般若院の住職であった。

彼はこれより先、高野山の九ヶ条の永格の御朱印を賜わり、関東真言古義法談所の庄迫を加へるべく関東の真言宗の寺院に対し、触れ書を出し、又頼慶自らも関東に対処する為に、関西に赴き、高野山より永格七条目の捷書を発令して、中々の威勢を振るい、同宗門の頭梁となった。

此の様な間柄の二人にも袂別の時が来た。快運は頼慶となごりおしみつゝ別れ高野の山を去って、はるばる東国に旅立って豆州に赴き、伊豆山権現の別当職として、伊豆山の般若院に落ち着いたのでした。(時に年卅六才)。

然るに伊豆山の快運と高野山の頼慶の日に日に隆盛となるを見ては、真言宗各本山の住僧等には必ずしも心良からず、不平不満の反対者は次第に増加し、最早取捨すべからざる險悪な迄

の状態を示すに至ったのである。

此の間に於て小田原城主第五代北条氏直は、豊臣秀吉の大軍に包囲攻撃されたので、第四代氏政の子氏直

は、我が最愛の妻(家康の娘)を、徳川家康の元に返へし、自らは落城の中を高野山に送られたが、其の時高野山よりは近江国迄お迎えを出し、敗戦の將氏直を出迎え、特別丁寧なる扱いによつて、高野山に預つたのである。其の頃高野山の座主は頼慶が前記の永格条目の威を振り、ついに其の為に四面遊歌の羽目となり

其の頃北条氏直は、豊臣秀吉の命令で、大阪城の近くの狭山と言う所に引取られる其の直後には高野山の座主法印頼慶はすこすこと、伊豆山権現別当の金子最明寺及箱根権現別当法印快運の元に走つたのであった。

其の後の頼慶は、快運の

元に蟄居し、慶長十四年十月十四日、ついに四十九才を一期として、親友快運元伊豆山般若院に於て、示寂せられたのであった。

元来伊豆山には伊豆流と称する法流があつたが、文禄三年に至り、永く伊豆に断絶していた此の重要な法流を伊豆山に取り返すべく法印快運は、伊豆流の正統を伝へていた法印有庵を今の茨城県吉田にある六地

大友氏 (下)

内田 武雄

しかしこの笠原氏と大友の關係は現在明らかにし得ない。小田原の所領役帳に笠原の姓は頻出しており、小机領を中心とする笠原氏との関連は充分考えられるしかし詳細は後日を期して明らかにしたい。

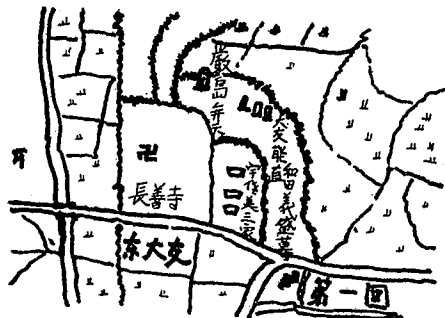
以上により長善寺と大友氏との關係が明らかになつて来たが、同じく当寺所蔵の「敵島弁才天略縁起」の中で周囲の地形を描写している部分がある。それによれば次のようになる。

(前略) 其後豊前豊後の守護職たる時、鎌倉在動の

藏寺(又は六藏寺とも言う)に尋ね得て、文禄三甲午年四月十一日に師匠法印有庵より伊豆流の正統を伝授して、伊豆山般若院に帰山して、再び伊豆に於て其の正統の中興の祖となつた其の後は、快運・高尊、秀海・聖応と伝へ、最明寺世代快盛・盛算・覚英に至り元禄時代に統いて其の流派が世伝されて今日に至つたのであった。

島弁才天の付近が湖水であつた事はあきらかである。以上のように大友氏と大友郷とくに東大友との關係は明らかであるがまだ其屋敷跡がどこであつたかと言うことである。

敵島弁才天の縁起の中で書かれてある。城のいぬいの湖水とは、言うまでもなくしぜん沼地で、当時の「こらみ」であつてこれが弁才天をお祀りした池にあたるのであろうこら考へた時に居城は長善寺と弁才天をふくめたその付近になる。今東大友に大





友能直の居城跡と言われている宇佐美三家がある。敷地内は約四反歩ほどの面積で北から「いんきよ」「なかい」「けえど」(街道)とは県道に面した家で当主は宇佐美滝三郎、なはいは本家で宇佐美義夫氏宅、いんきよは宇佐美信輝氏宅となる、客宇佐美の宅地の間は塀によってしきられていて、明らかに元米一単位であった屋敷地が分割されて今日に至ったものであり宇佐美家で「なはい」が本家で「いんきよ」、けえどと分家したと称し家同志の交際もその名残りをのこしている事からも実証できる西側一帯は現在水田となっているが、公民館、長善寺の北に開ける水田より低く屋敷沿いは土居がめぐらされ、用水が流れている。右に述べた西側は堀跡と推察できる。

前項で考察した宇佐美系譜についてみると、三軒の宇佐美を中心とみると現段階では延宝七年(一七五五)十月廿九日が上限である。(当家の位牌背面の年号の判読によって判明)。古文書は関東大震災で焼失しており、江戸時代における系譜がつかめないが、階層的には本百姓クラスであることは推定できる。

又宇佐美姓は東大友、永塚など近隣の地域にかけて多くみられ歴史的にも後北条氏の家臣にも見出されるし、古くは鎌倉幕府の御家人として、伊豆の宇佐美より出た宇佐美氏を見出すことが出来る。これらの宇佐美氏とここに検討中の宇佐美氏との系図的つながりは不明であるが、凡その階層を見究める一助となりうるのではなからうか。

右に見えたように、現在居住の宇佐美氏の上限は延宝七年、大巾に見ても江戸時代以前にもって行くことはできない。しかし江戸時代以前については、諸点から居住者の存在を確かめることが出来る第一には前項で述べたよ

うに、西側に土居の名残りを止め、その外部の水田が深さなどから判断して堀の遺構であるといえる。第二には「いんきよ」の部分(第二図参照)北の隅から約二十基の五輪塔が発掘されている。現在は一カ所に集積され合祀されているが屋敷内に菩提を弔ったものであり、少くとも中世末までのものといえる。

第三に北方百米程の和田堰の提防に(第二図参照)三坪程の墓域がある。碑文にある施主宇佐美八左衛門の末裔は現在永塚に居住し当主よりの関わりによると「碑文の三人……」とは、大友能直、和田義盛、松平十郎左衛門である。又当地では古くより上屋敷、中屋敷、のいわれがあり、上屋敷は和田屋敷(第一図参照)の和田堰より南、三軒宇佐美氏宅までの地、中屋敷は永塚の宇佐美氏宅、下屋敷は千代蓮華寺の地であると

言われているとのことである。右に述べた松平十郎左衛門は三州深津城主松平主殿助伊忠二男で仔細あつて当城下(小田原)に引越した東大友に往したものであり千代蓮華寺所蔵文書がこれ

を裏づけている。以上三点から考察した時、対象の屋敷地周辺には、中世を物語る要素が色濃くなってくるのである。次にこの中世的な要素をもう一步明らかにしてみよう。

まず前項でふれた、和田屋敷についてであるが、その主は和田義盛と言われている。

和田義盛はいりまでもなく初代鎌倉幕府の侍所であり平家追討、奥州征伐に功あり、頼朝の信任も厚く有力な御家人である。その出身は三浦義宗を父とし、相模国三浦郡和田に住したの和田氏を称している。したがって本領地は三浦の和田とするのが妥当であり、族屋敷などによる。

当時(東大友)との関係は史料的には管見の範囲では見出せない。しかし建保乱で義盛にしたがつて討死したものの多数に及び、その大部分が一族であることからいって、義盛自身の散地が当東大友に一時的にも存在したか、またはその一族の某の所領または屋敷があつたと言ふことも考えられることである。

次に前項でふれた「主人三人」の一人大友の能直との関係については前の項でふれたように明らかである以上資料 新相模風土記 大友長善寺過去帳、敵島弁天縁起笠原氏文書、芥川龍之介の活躍したといわれる大いに活躍したといわれる従って頼朝をはじめ各将軍は季隆を重んじて調度懸の所役を季永より建曆のころ(一一八〇—一一九〇年)ごろまで任じたほどだったが名譽を誇った季隆の弓は元久二年(一二〇五)に悲しい弓となった。

小田急線愛甲石田駅の東北方、円光寺裏山が愛甲城跡である。丹沢山塊のふもとに大きく張出した丘陵の尖端にある。相模平野を一望にして、ふもとに玉川が流れるさまは城郭を管む絶好の地勢であった。

その中で横山党という(小野妹子の裔)の子孫は八王寺横山を本拠に、近隣諸郷を押領して、一族はみる／＼内に大勢力を蓄えるようになった。

ここ愛甲氏は横山一党としてここに本拠を置いたのだった。

横山愛甲氏が本格的な領地経営に着手したのは鎌倉初期のこと、愛甲三郎季隆からである、季隆は頼朝、頼家、実朝三代源氏将軍に仕えたが、ことに文武両芸に秀でていた、弓をとれば鎌倉幕府でいちばんの腕前儀式典礼の故実の知識は曉達を極めて幕府威信向上に大いに活躍したといわれる従って頼朝をはじめ各将軍は季隆を重んじて調度懸の所役を季永より建曆のころ(一一八〇—一一九〇年)ごろまで任じたほどだったが名譽を誇った季隆の弓は元久二年(一二〇五)に悲しい弓となった。

頼朝なき後、北条時政の横政は旧勢力の排斥であり、その第一弾が名将畠山重忠にくだった。時政の讒言に乗った愛甲一族は北条軍の先鋒にあつて、重忠の軍を鶴ヶ峰(横浜市保土ヶ谷区)に迎えた。ここで季隆の放

横山一党の本拠城 (上)

愛甲三郎の弓と畠山重忠の死

神保 酉蔵

つた一矢で重忠は討死を乞ったのだった。

建暦年間に季隆は没するが、その子どもたちや一族は北条氏横政に反旗をひるがえした、和田義盛に加担建保元年(一一二二)五月愛甲小太郎、同三郎、同五郎三人が討死、愛甲左衛門同太郎はいけどりの身となった。こうして愛甲氏は滅亡をとげるが、横山党のほとんどが義盛に加担したため滅んでいる。

その後、愛甲城がどのようになつたかはまったく不明である。おそらく、地の利から戦略的にみて、戦国時代に支城が置かれていたのであろう。

今城址は畑と円光寺の墓地となつて、まったく姿をとどめていない、おまけに小田急線の軌道が城址を突切る形でえぐりその全容を知るには困難となつている。わずかに円光寺の所に削残を止めるにすぎない。

なお丘陵上に位置する、愛甲一族の墓があり、愛甲稲利神社があり季隆が祠つてある。

これは愛甲城の守護神であつたと伝わる。

この項では、愛甲季隆は北条時政に謀かれて重忠に矢を放つたようであるが史跡大系で、重忠を滅ぼすに稲毛三郎重成を招き時政の密計を明して急ぎ上使を畠山の館のある、菅谷に遣して重忠を召そうとした、重忠は老臣榛沢六郎成清の邸に行つていた。報を聞知らされいそぎ馬を馳らせて荒川を渡り館に帰つて上使に對面、上使「容易ならぬ陰謀があり、其の追討使を仰せつけられし故いそぎ、一族を引連れ出府すべし、委細は直々仰せ含められるること」

重忠不審に思つたが、君命であるので、辞すべきようもなく、委細埒り奉る、と上使を還し、重保に三十余騎を率いさせ、六月十八日菅谷を出発二十日の夜、鎌倉の邸に入った。

翌日稲毛三郎茂成が菅谷の館に訪れた、ハテさて珍らしき人の訪れ来るものかな、と思ひ對面すると、重成丁寧に会釈した後、「昨日鎌倉より御使者を以て、謀叛の者あり、守護の爲め早々御一族を催はして、御出府あるように我家の者は大半鎌倉に在れば此のまゝ

曾我物語考

神 保 栄

曾我物語りに依りますと鎌倉殿入富士野、伊豆国住人召尾河三郎云、汝此殿原有縁聞食、此等首共預汝、送曾我可葬送被仰畏喜、二人足高送曾我里、文形身時母佐帳、焦倍見二人子共首、倒懸足高何子共引具一道計消入哀

愛子佐美禪師在駿河平沢山寺本久能法師為此人共從父急尋入富士野、葬送二人死屍白骨懸首、六月二日入曾我里曾我今月拾此殿原首、折節母曾我殿二宮女房二人殿原乳母女房運取付禪師袂喚叫

右の二つの記録を見ると明らかに兄弟の首及遺骨は曾我に送られている。

源頼朝の命にて尾河三郎は二人の首を宇佐美禪師は白骨を頸にかけて曾我に入つてゐる。お花畑はどこかここに不思議にも昭和三年中村歌右エ門丈が曾我兄弟の為に城前寺へ碑を建立した時土塁内の佐宗福太郎氏

行つた。曾我物語りに依りますと鎌倉殿入富士野、伊豆国住人召尾河三郎云、汝此殿原有縁聞食、此等首共預汝、送曾我可葬送被仰畏喜、二人足高送曾我里、文形身時母佐帳、焦倍見二人子共首、倒懸足高何子共引具一道計消入哀

が籤を開懸したら石が籤へ当りましたので取り出すと地蔵尊の顔をそいたのが出たので不思議に思い尚も下しを掘ると瓶が出て来たので中を見ると白骨であったので驚いて城前寺へ預けました、丁度曾我兄弟遺跡保存

会を設立した折柄であつたので早速黒板博士の鑑定を御願ひ致しましたら其結果歯は青年のものだと云われた中村歌右エ門丈は市川団右エ門丈の一行をして下曾我駅前曾我商會に於て曾我兄弟の追善興行を行いました。そして雑費の残額は兄弟の供養料とされたのでした。

白骨は城前寺へ蔵かに埋葬されました事を附記致します。

片浦支部行事

伊豆地方源頼朝史跡巡り

鈴木 平 八

天下の偉人源頼朝が源氏再興の旗を挙げた石橋山古戦場をもつ支部会員は、念願の頭書の史跡巡りを去る七月二十四日に行いました。第一の目的地は三島大社です、天下の嶮箱根は湯本山崎から国道一号に別れて新道を登りつゝ右手に「畑宿」の家並が雨にけがる木々の間から姿を見せる時、中野会長今日のコースの説明が行なはれました。右に左に廻る道もけわしいが

源頼朝が平治の乱に、父義朝が平清盛と戦つて敗れた際捕えられて流された処である。頼朝は永曆元年(一一六〇)一四才の時から治承四年(一一八〇)三十四才まで二十年間この配所にあつて、同年八月ここから兵を集めて石橋山に挙兵したのであります。

こうした中野会長の説明の中に頼朝が八重姫と、又政子との恋愛問題を入れて同行の会員一同、一層の興味が増した事でせう。かつては頼朝も歩いたであろう山木館跡へ徒歩にて行く、治承の頃伊豆国司目代として平兼隆が住して山木判官と名乗つていたのであり、頼朝は挙兵に先立ち

八月十七日これを襲撃して兼隆の首を得て凱歌を挙げた所であります。

現在では私有地に帰してわずかに片隅の雑草の中に自然石が見えて館の所在地だけを残すのみであります。次いで近くにある葦山博物館と江川邸を足早に見学して、再びバスの人となり北条政子誕生地と「願成就院」へ急いだのであります。さすがに北条氏の邸宅跡である広大な土地は風景にも恵まれて、一方は狩野川に添い周りは山にかこまれての要害の地でもある、頼朝夫人政子が誕生うぶ湯を使ったという井戸も見ることが四辺は何等手入れもせられず放任されている様は、何故か寂しく感じられました。次いで「願成就院」に詣でることにした、葦山町寺家(しげ)にあつて高野山派の真言宗で、文治五年(一一八九)源頼朝の奥州征伐の時北条時政が其の戦勝を祈願して建てたという。時政は晩年の六年間はこゝに住んで歿した、其の墓もある寺宝の阿弥陀如来座像、不動尊、多聞天像は国重要文化財で実に見事な出来ばへで驚きました。

長岡温泉で昼食をとり、午後の目的地伊東へと向います、実に伊豆の山々を眺め乍ら漸くにして亀石峠にかゝる頃は全く快晴暑くて困りました。太平洋の潮の香をのせた風が肌にも感じました時は伊東市内です。早速伊東祐親の墓へ、巨幹の老松が天高くそびへたその根本に一基だけ眠って居ります、祐親と云へば頼朝が石橋山合戦の時、平家方に味方して石橋山の西方丘上に陣して頼朝を攻めた、戦後

に現地に移したもので、走らぬ湯権現とも云はれた、火牟須比命、伊弉諾命、伊弉冊命の三神を祭った。古来関東総鎮守であった名社である。源頼朝が深く尊崇し、夫人政子が初め山木判官に嫁する事になったが、結婚の当夜山木を逃れ夜行して当時神社に滞留中の頼朝のもとに來たつて結婚したのは、有名な話である、又石橋山合戦の時政子をこ

去る七月十三日、穂坂辰己さんがなくなられた。肝硬炎だそうで、本名は重吉生家が辰巳の方向にあるので辰巳と称された。曾我別所村の生まれで、兵隊から帰つてくると、家の庭前で近所の仲間と剣道に「エイヤツ」と心身の鍛錬に努めたり、当時農家のドル箱といわれた養蚕のリーダーとしてよく人の面倒もみられた。

と現地に移したもので、走らぬ湯権現とも云はれた、火牟須比命、伊弉諾命、伊弉冊命の三神を祭った。古来関東総鎮守であった名社である。源頼朝が深く尊崇し、夫人政子が初め山木判官に嫁する事になったが、結婚の当夜山木を逃れ夜行して当時神社に滞留中の頼朝のもとに來たつて結婚したのは、有名な話である、又石橋山合戦の時政子をこ

辰巳さんのこと

穂坂行雄

下曾我 よいところ
手拍子 そろえて
ヨイヤサ
下曾我よいところ
手拍子そろえて
ヨイヤサ
以下略

扇町の由来と井細田バイパス

星野喜久雄

小田原市に扇町が誕生した。東海道線、小田急線、酒匂川、狩川にかこまれた地域で、昭和四十六年十月一日より改名された。旧名で寿町、池上、井細田、多古の大部分と荻窪の一部を包含する。新町名の由来は図面で見ると、新町名を付けるに当り各隣組で論議され桐座町、足柄町、二川町、北町など出されたが多数意見で扇町と決つたと聞く。これで旧幕時代からの町名は消えた。

自動車の激増は交通量の増加となり、旧幕時代の道路の拡幅改良をもつてしては、さばけず、新道路の建設が県土木の企画するところとなり、九億の金をかけて山王川にかゝる扇橋を含めて、バイパス(幅員15米)は完成した。多古、井細田池上、寿町の曲折の多い甲

原稿のお願い

感想、隨筆、和歌、俳句雑文、会員の動向等なんでも結構です。皆様のご投稿をお願い致します。原稿は一般用紙(四百字詰)で三、四枚。会の用紙(二百二十字詰)は五枚(拾枚以内)をお願い致します。原稿の送り先は市内栄町二二

小林泰助まで。(編集部)